

〈研究ノート〉

学びの連続性を保障する生活科の授業デザインの提案

A Proposal of Living Environment Design That Assure Continuity of Learning

浜松学院大学短期大学部 川島 隆*¹

浜松学院大学短期大学部 甲賀 崇史*¹

要約：幼小接続期の教育の在り方については、これまでも多くの実践や研究が蓄積されてきている。しかし、保育者や小学校教員が、連携の取組をどのように感じ、子供の実態に合わせて自らの振る舞いを変化させているのか、保育者や小学校教員が接続に関してどんな思いを持っているのかについて、これまでに十分な研究や検討がなされているとは言い難い。本研究は、静岡県 A 市で幼小接続に取り組む幼稚園等 5 歳児学級担任と、小学校 1 年学級担任を対象としたインタビュー調査を通して、幼小接続に関わる教育現場の実態及び成果と課題を明らかにし、子供の学びの連続性を保障するための生活科の授業デザインの在り方について提案することを目的とした。インタビュー調査は、4 中学校区（学府）小学校 4 名、園 4 名計 8 名を対象として、2021 年 7 月中旬から 7 月下旬までの期間に、半構造化面接の形式で実施した。インタビュー記録で得られたデータを佐藤（2008）のコーディング手続きを参考にしながら、協議を重ねた結果、計 9 つの内容が抽出された。その中で、授業デザインの提案に関わる内容は 5 つであった。これらをもとに導かれた学びの連続性を保障する生活科の授業デザインについての提案は、以下の 3 つである。

- (1) 小学校生活科の単元の導入にあたっては、幼児期に育まれてきている「主体性」をより伸張していくため、3 つの「自由度」（活動内容、空間、時間）を大切にすること。
 - (2) あらかじめ準備されたプランありきではなく、子供の声に耳を傾け、受容しながら子供と共に授業をデザインするという意識を大切にすること。
 - (3) 小学校の授業における学び合いの礎を培うため、協働的な活動を重視すると共に、子供同士が互いの声を聴き合いながら問題解決へと導けるようにすること。
- 以上の 3 つの提案を、調査協力園・小学校にフィードバックし、A 市の幼小接続の一層の充実につなげていくことが今後の課題である。

Key words：幼小接続、学びの連続性、生活科、カリキュラム

I 問題と目的

子供の発達や学びの連続性を保障するため、幼児期の教育（幼稚園、保育所、認定こども園における教育）と児童期の教育（小学校における教育）が円滑に接続し、体系的な教育が組織

的に行われることは、極めて重要である（文部科学省、2010）。また、2017 年の小学校学習指導要領の改訂では、円滑な幼小接続の観点から、合科的・関連的な指導の工夫を各教科において進め、指導効果を一層高めることが求められている（文部科学省、2017）。

幼児期の「学びの芽生え」と、小学校の「自覚的な学び」をつなぐものとして、小学校入学

*¹ Takashi KAWASHIMA
Takashi KOHGA
Hamamatsu Gakuin University Junior college

当初における「スタートカリキュラム」がある（国立教育政策研究所，2017）。「スタートカリキュラム」とは、小学校に入学した子供が、幼稚園、保育所、認定こども園などの遊びや生活を通した学びと育ちを基礎として、合科的・関連的な指導のもとで、新しい学校生活を作り出していくためのカリキュラムのことである。そして、「スタートカリキュラム」の中核となるのが生活科であると言われている。生活科は、具体的な活動や体験を通して、身近な生活に関わる見方・考え方を生かし、自立し生活を豊かにしていく教科である。その意味で、幼児期に育まれた資質・能力をボトムアップ的に接続しやすい教科でもある。したがって、生活科の授業デザインが、幼小接続の鍵を握っていると考えられる。

幼小接続期の教育の在り方については、これまでも多くの実践や研究が蓄積されてきている（一前・秋田・天野，2019）。例えば、幼児と児童の交流や保育者と小学校教員間の子供の情報の伝達、移行期のカリキュラム作成等である。また、幼小接続とのかかわりから、生活科に焦点化した実践や研究も報告されている。久米（2020）は、幼小で行われている栽培活動に着目し、それぞれの教育的効果を検討している。福元（2018）は、生活科教科書の教師用指導書の中で幼小接続を図る観点がどのように導入されてきたかを考察している。池田（2016）らは、接続期の生活科と音楽科の授業を保育者と小学校教員が協働で実施、検討することで、カリキュラム開発につなげるという研究報告をしている。

一方、日々子供たちと接し、指導にあたっている保育者や小学校教員が、連携の取組をどのように感じ、子供の実態に合わせて自らの振る舞いを変化させているのか、保育者や小学校教員が接続に関してどんな思いを持っているのかについて、これまでに十分な研究や検討がなさ

れているとは言い難い。

そこで、本研究では、幼小接続に関わる教育現場の実態及び成果と課題を明らかにし、子供の学びの連続性を保障するための生活科の授業デザインの在り方について提案することを目的とする。

具体的には、静岡県 A 市で幼小接続に取り組む幼稚園 5 歳児学級担任と、小学校 1 年学級担任を対象としたインタビュー調査を行う。A 市は、小学校 22 校、中学校 10 校、幼稚園保育園こども園 57 園が設置され、県内では比較的早期に小中一貫教育を導入している。また、各中学校区の小中学校全体を「学府」と称し、平成 25 年度から市内全ての中学校区において、小中一貫教育を段階的に導入している。同時に、学府の特徴や地域性に応じて、学府内の幼児教育施設も加えた、保幼小中の一貫教育を推進している。さらに、A 市は、公立私立全ての保幼小を対象として、接続にかかる研修会の実施や接続の具体を示すリーフレットの作成など、円滑な接続に向けた取組を組織的に進めており、A 市の各学府の学校・園の取組から、遊びから生活科への移行に関わる実態の有益な知見を得られるものと考えられる。

II 方法

1. 対象者

A 市教育委員会並びに子供部幼稚園課保育園課に依頼して、研究協力者を推薦してもらった。市内 4 つの学府（以下、A 学府、B 学府、C 学府、D 学府とする）に所属する教員（以下、小学校教員 a、b、c、d、保幼小こども園保育者 e、f、g、h とする）が対象者として選定された。A 市は全 10 学府あるが、そのうち 4 つを選定した理由は、小中一貫教育の開始時期の特徴に基づいている。すなわち、A 学府、B 学府は平成 24 年度から他の学府に先駆けて試験的に一貫教育を導入しているのに対して、C 学府、D 学府は、

表1 調査対象とした学校・園の特徴と接続状況

校区	小中学校	保こ幼稚園	地域性	一貫教育開始
A	1中2小	1公立こども園1私立幼稚園	市中心部	2013(平成25)
B	1中2小	1公立こども園1公立幼稚園1私立こども園	農村部	2013(平成25)
C	1中3小	2公立保育園1公立こども園1公立幼稚園	海岸部	2016(平成28) *
D	1中2小	2公立幼稚園1私立保育園	住宅地	2016(平成28) *

※ *印は、今後、すでに保こ幼稚園の再編が決定している
 ※ 調査対象としている小学校の設置・接続状況は、主に以下のとおり
 A校区は、1小と2園との接続 B校区は、1小と2園との接続
 C校区は、1小と3園との接続、D校区は、1小と2園との接続

表2 インタビュー調査対象とした教員・保育者のプロフィール

対象	所属校区	校園種	経験年数	現在担当学年
a	A	小学校	32年	2年主任(2020年1年主任)
b	B	小学校	9年	1年担任(2020年3年担任)
c	C	小学校	38年	1年主任(2020年1年主任)
d	D	小学校	20年	1年主任(2020年1年主任)
e	A	こども園	17年	5歳児担任経験者
f	B	幼稚園	13年	副主任兼3歳児担任
g	C	保育園	14年	5歳児担任(2020年4歳児担任)
h	D	幼稚園	36年	主任兼4歳児担任

* 対象とした小学校と園の位置関係は、以下のとおり
 A: 200m圏内、B及びC: 同敷地内、D: 隣接
 * A校区こども園では、現5歳児担任を含め、5歳児担任経験者3名が対応 経験年数は中央値

平成28年度と最も後発で実施されている。

次に、教員の選定基準については、小学校教員は1年生の担任経験、幼稚園等教員は5歳児の担任経験があること、市幼稚園保育園課主催の幼小接続に関わる研修会「保幼こ小合同研修会」に参加し、接続カリキュラムの作成に関与していること、ならびに相互に授業・活動の参観を経験していること、の条件を満たす者とした。「保幼こ小合同研修会」の内容とは、接続カリキュラムに関わる協議、学府内の教員の情報交換、相互参観の計画についての検討などである。それぞれの学府の特徴を表1に、教員のプロフィールを表2に示した。

B、C、Dの3学府は、小中一貫教育の取組開始時から、園との接続にも取り組んできている。A学府については、2020年度より園との接続に

取り組み始めたところである。

なお、保こ幼との接続の実態について、主として1小1園または、1小2園であるが、近年の幼保の合併や新設園の存在が接続の在り方に影響を及ぼしている可能性がある。加えて、園の位置関係も接続の有りに少なからず影響をしていると思われる。小学校敷地内あるいは隣接している園もこれまでの設立の経緯から多く見受けられる。対象とする園については、こうした要素も加味しておく必要がある。

2. 手続き

インタビュー調査は、2021年7月中旬から7月下旬まで、対象者の勤務園(校)の会議室など各対象者が話しやすい場所にて、半構造化面接の形式で実施された。

調査時間は、対象者によって若干の差は見られたが、その平均は約30分であった。面接は、次に示す調査内容に沿って行った。

3. 調査内容

調査内容は、以下の通りであった。

- (1) 園長・校長と懇談し、学府内における接続状況の概要や園・学校経営における接続のとらえについて聞き取り調査を行った。
- (2) その後、対象となる教員・保育者に対して、以下の内容のインタビューを行った。

① 小学校教員

- 円滑な適応ができるよう入学後の初期指導で配慮している事柄
- 幼小接続の観点から、生活科の授業づくりで配慮している事柄
- 入学当初における生活科の授業の具体的な展開事例

② 保育者

- 円滑な適応ができるよう5歳児後半の指導で配慮している事柄
- 幼小接続の観点から、生活科の授業につながる活動において配慮している事柄
- 5歳児後半で、幼小接続を意識した生活科につながる活動の具体的事例

4. 分析手続き

インタビュー記録で得られたデータを佐藤(2008)のコーディング手続きを参考にしながら、協議を重ねた結果、計9つの内容が抽出された。その中で、授業デザインの提案に関わる内容は、5つであった。

Ⅲ 結果及び考察

5つの内容を順に示し、考察を加える。

1. 「自由度」の高い単元の導入

- (幼小接続を)特に、幼稚園との接続は意識していないかもしれないが、外遊びでは、「春を探そう」など、自由度が高い活動を導入している。また、名刺カードを配って、友達づくりをしている。

(A 小学校 a 教員)

「特に幼稚園との接続は意識していない」と語りながらも、単元の導入では、「自由度が高い活動」を意図的に組み入れて、授業を創っていると述べている。

すなわち、「自由度」とは、活動内容の自由とともに、空間的な自由、時間的な自由も確保しているものと考えられる。どのような場で、いかなる活動をするのかを子供の思いや発想に委ねることやある程度弾力的に授業時間を運用して時間的な自由度も確保することである。これにより、幼稚園教育等で重視されている、子供たちの主体的な活動を大切に、子供にとってのつながりを意識しているものと考えられる。

接続する明確なカリキュラムがなくても、こうした学級担任レベルの子供への寄り添いが、子供にとっての接続になると思われる。反対に、カリキュラムを運用する個々の教員に接続の意識がなければ、子供にとっての接続は必ずしも実現されないだろう。

- 小学校の学習を意識しているわけではないが、学習にあたって興味をもたないと始まらないと思うので、幼稚園では、それを大切にしている。虫など子供が興味をもったことをとことん一緒に見たり調べたりすることを大切にしている。

(A こども園 e 教員)

- 満足感や達成感を大切にしている。「じゃがいもがたくさんとれた。みんなで数えよう」となったときに、10ずつ数えて「370だね」、と数の方向性にもっていったりしている。生活科や他の教科にもつながっているのではないかと思います。

(A こども園 e 教員)

幼稚園・こども園では、この回答に見られるように、主体的に取り組む態度の基礎につながっていく「興味」を大切にしようという意識を持って子供にかかわっていることが伺われる。また、「満足感や達成感」においても、「興味」同様に次の学びへの原動力となり、学校教育で育みたい態度の礎を培うことにつながるのではなかろうか。

2. 子供の声や姿を踏まえた学びの環境づくり

○ 生き物とかは、今までも触れてきているし、好きな子も嫌いな子もいて、幼稚園の経験から差がわかれているんだなあと思う。この間生活で砂場遊びした時も、砂で泥だんごを作っていると、「水を砂に入れると、もっと固まるんだよ」「ここを掘ると川になるんだよ」といったやりとりがあったり、「幼稚園のときはこうやったよ」という声が聴かれた。こうした話ができるように、砂場を広くとったり、必要な道具をおいておくようにした。

(B 小学校 b 教員)

○ ちょっと頭をひねらないと遊べない遊び方、過去にやったことのない新しい工夫のある遊び方、そういった提案をしていくのが生活科だと思う。そのあたりの遊びの幅が幼稚園と小学校とは違うのではないか。幼稚園の遊び方を広げていけるといい。

(B 小学校 b 教員)

本教員は、子供との対話や子供を観察することを大切にしていることがうかがえる。つまり、出身幼稚園や保育園によって、あるいは個々によって、経験してきている遊びには差があることを、子供の声や活動での子供の姿から直に感じ取っている。そして、園での経験の差、園での学びをもとに、より豊かな経験をさせたり、構想する力を育んだりするための授業の場づくりや教材の準備へとつなげているのである。

3. 子供の気付きを生かした単元の導入

○ 教科書の中にスタートブックがあって、それに「こうやって授業を受けるんだよ」と書かれているので、それを使って教えている。例えば、「あそこに遊具があるね」と言って、外に出て遊具で遊ぶ。その後、校舎に戻ってくるとき、校舎を見ると、沢山の窓が見える。

子供が「いっぱい窓があって、いろんな教室があるんだね」と気づく。「行ってみたい」という声が出て、「学校探検してみようか」という感じで活動が始まる。そんな感じ。生活の時間という感じではなく。

(C 小学校 c 教員)

「教科書の写真→遊具への気付き→遊具遊び→校舎への気付き→学校探検」というように、これまでの学習指導要領で重視されてきた「気付き」を生かして、新たな活動へと子供を導いている。子供たちは、自分たちの気付きが活動につながっていることを認識し、さらに気付きを生んでいこう。

4. 小学校の学び合いにつなげる協同的な活動

○ 小学校のために、というわけではないが、何か課題や問題があったときに、クラスみんなで話し合って解決するとか、どうしたらよいか考えて方向性を考えたり、みんなが気持ちよく生活できるように話し合ったりしている。そういうところは5歳児として意識しているところですね。

(A こども園 e 教員)

園では、保育者の支援を受けながら、生活の中で出会った問題を子供たち同士が話し合い、解決している。それは、友達の思いや考えを聞き、自分の考えを伝える、学び合いの基礎づくりとなっている。

そして、以下の内容は、直接生活科に関する回答ではないが、授業デザインに関わる内容と考えられるので、ここで取り上げておきたい。

5. 情報交換の内容と時期についての検討

○ 教員の交流は、5月後半の小学校生活に慣れ落ち着きを持った生活ができる段階よりも、初期指導を行っている段階で行い、情報交換ができるとよい。年長児の子供が、何がどこまでできるのか、その実態を教員間の情報交換により把握しておくことで、より効果的な指導、幼小でつながりを持った指導ができるのではない。

(B 小学校 b 教員)

入学後の授業を創っていくためには、「何がどこまでできるか・経験しているか」を把握していることが重要であり、そうした情報は、従来「保幼小連絡会」が実施されている1学期半ばとなる5月後半から6月上旬よりも、4月中下旬が望ましいと語っている。授業が進み学級経営が落ち着いた時期よりも、子供たちが学校生活や授業に馴染もうとしている時期の方が、子供の側から考えたときによりよい接続になるのではないかという学級担任の実感である。なお、静岡県においても同様に4月当初に教職員の顔合わせが提案されている（静岡県教育委員会, 2018）。

最後に、B 幼稚園 i 園長の言葉を紹介しておきたい。これからの方向性について語ったものである。

○ 5歳児と1年生と各担任が、同じテーマ、環境の中で授業、活動をする機会がほしい。そうすれば、それぞれの考え方や子供の見取り、言葉掛けの違いがお互い理解できるのではない。

合同授業については、これまでに研究報告もなされ、その価値も論じられてきている（久野, 2004, 田代, 2018）。幼小接続が、互いの授業・保育参観にとどまることなく、生活科を核に合同授業・保育を行うことで、より深い接続となるであろう。そして、それは、教員の力量形成につながるものと考えられる。

IV まとめ

学びの連続性を保障する生活科の授業デザイン

ンについて、本研究で示された結果と考察から導かれる提案は、以下の3つである。

(提案1) 小学校生活科の単元の導入にあたっては、幼児期に生まれてきている「主体性」をより伸張していくため、3つの「自由度」（活動内容、空間、時間）を大切にすること。

(提案2) あらかじめ準備されたプランありきではなく、子供の声に耳を傾け、受容しながら子供と共に授業をデザインするという意識を大切にすること。

(提案3) 小学校の授業における学び合いの礎を培うため、協働的な活動を重視すると共に、子供同士が互いの声を聴き合いながら問題解決へと導けるようにすること。

本研究で示された3つの提案を、調査協力園・小学校にフィードバックし、A市の幼小接続の一層の充実につなげていくことが今後の課題である。

V 引用文献

- 1) 文部科学省：「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）」, 2010.11.11
- 2) 文部科学省：「小学校学習指導要領解説 総則編」, pp71-72, 2017.07
- 3) 国立教育政策研究所：「スタートカリキュラム スタートブック」, 教育課程研究センター, 2017.01
- 4) 一前春子・秋田喜代美・天野美和子：「保幼小連携の取り組みに対する保育者と小学校教諭の振り返りにみられる特徴－取り組みに影響を与える要因とは何か－」, 国際幼児教育研究 Vol.26, pp39-50, 2019
- 5) 久米央也：「領域『環境』における栽培活動と小学校生活科における栽培活動の教育的効果についての研究」, 滋賀短期大学研究紀要第45号, pp13-30, 2020
- 6) 福元真由美：「生活科教科書の教師用指導書における幼児教育に関する記述の変遷」, 東京学芸大学紀要 69, pp129-139, 2018.02

- 7) 池田明子・広兼 睦・掛 志穂・中山美充子・石井信孝・松崎伸一・長澤 希・石田浩子・井上 弥・中村和世・三村真弓：「幼小接続期におけるカリキュラムの開発」, 広島大学学部・附属学校共同研究紀要 第44号, pp177-183, 2016.03
- 8) 佐藤郁哉：「質的データ分析法」, 新曜社, 2008.03
- 9) 静岡県教育委員会：「静岡県版幼小接続モデルカリキュラム『じぶんでできた！いっしょにやろう！』」, p62, 2018.12
- 10) 久野弘幸：「幼小接続研究の現状と課題」生活科・総合的学習研究 (2), pp11-19, 2004.03.15
- 11) 田代高章・大野眞男・山崎浩二・下山 恵・千葉紅子・渡邊奈穂子・高橋文子・小野章江・吉田美奈子・川村真紀・阿部真一・高室 敬・板垣 健・松村 毅・菊池香ゆり・市川あゆみ：「幼小接続教育の在り方の調査研究～生活科とのつながりの中で～」岩手大学教育学部プロジェクト推進支援事業教育実践研究論文集 5, pp83-88, 2018.03

倫理的配慮

論文公表における倫理的配慮に関しては、浜松学院大学短期大学部の倫理審査を受け、承認された。

(令和3(2021)年12月16日受理)

Abstract

A Proposal of Living Environment Design That Assure Continuity of Learning

Hamamatsu Gakuin University Junior college Takashi KAWASHIMA

Hamamatsu Gakuin University Junior college Takashi KOHGA

The childhood's connection practices and researches have been studied in some detail.

However, how the ECEC teachers and elementary school teachers feel about the mutual collaboration efforts and how they change their behavior as to the actual situation of children remain unclear. This study clarified the present situation, achievements and issues of childhood's connection through an interview survey for the 5-year-old class teacher and the elementary school first grade class teacher who works on the connection in A city, Shizuoka prefecture. Then, a proposal of living environment design to assure the continuity of learning of children were suggested. The interview survey was conducted from mid-July to late July 2021 for a total of eight teachers. Based on the interview records, three proposals were suggested for living environment design that assure the continuity of learning:

- (1) Three "degrees of the freedom" (activity content, space, time) are emphasized for child's agency when introducing the elementary school life course unit.
- (2) The listening the children's voices and the acceptance them are emphasized rather than having a plan prepared in advance.
- (3) The collaborative activities and the children's mutual voices leading problem solving are emphasized for cultivating the foundation of learning in elementary school classes.

The future task is to feed back the three proposals to the ECEC and elementary schools, and enhancing the childhood's connection in City A.